菊之助の礼儀

長谷部浩

新潮社

菊之助の礼儀

長谷部浩

新潮社

長谷部 浩

1956年埼玉県生まれ。慶應義塾大学卒。演劇評論家。現在、東京藝術大学美術学部教授。東京新聞の歌舞伎評を担当。紀伊國屋演劇賞審査委員。著書に『菊五郎の色気』『野田秀樹論』『傷ついた性　デヴィッド・ルヴォー　演出の技法』『4秒の革命　東京の演劇 1982－1992』など。蜷川幸雄との共著に『演出術』。また、編著に、『坂東三津五郎　歌舞伎の愉しみ』『坂東三津五郎　踊りの愉しみ』などがある。

菊之助の礼儀（きくのすけ　れいぎ）

著　者／長谷部 浩（はせべ ひろし）

*

発　行／2014年11月25日

発行者／佐藤隆信

発行所／株式会社新潮社

郵便番号 162-8711　東京都新宿区矢来町71
電話・編集部03(3266)5411・読者係03(3266)5111
http://www.shinchosha.co.jp

*

印刷所／株式会社光邦

製本所／加藤製本株式会社

*

©Hiroshi Hasebe 2014, Printed in Japan

ISBN978-4-10-336751-2　C0095

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社読者係宛お送り下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。
価格はカバーに表示してあります。

1 美しさの謎 『京鹿子娘二人道成寺』 7
2 京・四条・南座 『弁天娘女男白浪』 18
3 初対面の日 『グリークス』 24
4 アッピアの夜 『弁天娘女男白浪』 31
5 立役への道 『児雷也豪傑譚話』 37
6 海老蔵襲名 『助六由縁江戸桜』 42
7 早朝のパリ 『鳥辺山心中』 46
8 菊之助の礼儀 『NINAGAWA 十二夜』 54
9 仲違い 『加賀見山 旧錦絵』 62

10 去りゆく人と　『二人椀久』　66
11 アスリートの体力　『春興鏡獅子』　74
12 ブロマイドのなかの親子　『与話情浮名横櫛』　80
13 大顔合わせ　『仮名手本忠臣蔵』　93
14 赤坂・ロンドン・銀座　『曾根崎心中』　98
15 平成中村座の菊之助　『菅原伝授手習鑑』　109
16 立女方への道　『伽羅先代萩』　120
17 立役への挑戦　『盟三五大切』　128
18 真実の恋　『摂州合邦辻』　136

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

19 東日本大震災を受けて　『うかれ坊主』『藤娘』　143
20 初役の一年　『籠釣瓶花街酔醒』　149
21 歌舞伎座新開場　『熊谷陣屋』　160
22 哀れな女　『東海道四谷怪談』　166
23 弁天小僧を生きる　『青砥稿花紅彩画』　173
24 桜の花の舞い散る頃に　『京鹿子娘道成寺』　177
25 新しい命　『勧進帳』　181
あとがき　185

菊之助の礼儀＊目次

1 美しさの謎 『京鹿子娘二人道成寺』 7
2 京・四条・南座 『弁天娘女男白浪』 18
3 初対面の日 『グリークス』 24
4 アッピアの夜 『弁天娘女男白浪』 31
5 立役への道 『児雷也豪傑譚話』 37
6 海老蔵襲名 『助六由縁江戸桜』 42
7 早朝のパリ 『鳥辺山心中』 46
8 菊之助の礼儀 『NINAGAWA 十二夜』 54
9 仲違い 『加賀見山 旧錦絵』 62

10 去りゆく人と　『二人椀久』　66
11 アスリートの体力　『春興鏡獅子』　74
12 ブロマイドのなかの親子　『与話情浮名横櫛』　80
13 大顔合わせ　『仮名手本忠臣蔵』　93
14 赤坂・ロンドン・銀座　『曾根崎心中』　98
15 平成中村座の菊之助　『菅原伝授手習鑑』　109
16 立女方への道　『伽羅先代萩』　120
17 立役への挑戦　『盟三五大切』　128
18 真実の恋　『摂州合邦辻』　136

19 東日本大震災を受けて　『うかれ坊主』『藤娘』　143
20 初役の一年　『籠釣瓶花街酔醒』　149
21 歌舞伎座新開場　『熊谷陣屋』　160
22 哀れな女　『東海道四谷怪談』　166
23 弁天小僧を生きる　『青砥稿花紅彩画』　173
24 桜の花の舞い散る頃に　『京鹿子娘道成寺』　177
25 新しい命　『勧進帳』　181
あとがき　185

菊之助の礼儀

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

一、美しさの謎

『京鹿子娘二人道成寺』

あるとき尾上菊之助が真顔で、

「ぼくはそんなには、きれいではないですよ」

と、もらしたことがある。

それは平成二十年の二月、大阪松竹座で『京鹿子娘二人道成寺』を踊ったときのことだった。

当時、菊之助は三十歳。若女方として冴え渡るような美しさを舞台で見せていた。

松竹座のロビーは二階にある。女性客が、

「今、だれよりもきれい」

「溜息をつきたくなるくらい」

「そう、品のある美しさよね」

楽しそうに話すのが聞こえてきた。

さりげなく振り返って見た。三十代前半と思えるふたりは和服だった。
ひとりは、白大島の着物に錆朱地の菊柄の帯。もうひとかたは、黒の縮緬地に源氏香の模様、帯は白の塩瀬で、菊に重ね扇の箔押し。
菊花の帯を締めているのは、菊之助の贔屓だからだろうか。
衣紋の抜きも浅く、帯幅も控えめ。きりりとした着こなしで清々しい。
関西の言葉ではないところからみると、東京からこの公演を観るために来た熱心なファンのように思われた。そんな贔屓の観劇旅行を「遠征」と呼ぶのだと、どこかで聞いた。
坂東玉三郎と『二人道成寺』を踊るのは、このときが三度目にあたる。玉三郎は、尊敬する先輩であり、師ともいえる存在である。
このふたりが初めて『二人道成寺』を踊ったのは、四年前にさかのぼる。平成十六年一月、歌舞伎座。
このとき、菊之助は、玉三郎の踊り方に「合わせよう、ついていこう」とするひたむきさが目立った。今回、三度目にあたる松竹座の舞台では、ふたりの白拍子花子が、対等に踊っているように見えた。
四年の歳月が役者としての菊之助を成長させ、踊り手としての腕も急速にあがった。

松竹座からほどちかい道頓堀の脇にクロスホテルがある。以前は、ホリディイン南海といった。交通の便のよさもあって、このホテルを宿泊先に選ぶ役者も多いと聞く。

二階のレストランの奥にこぢんまりとしたウェイティングバーがある。話を聞くために、このバーで菊之助を待った。

やがて、

「お待たせいたしました」

先ほどまで白拍子花子を踊っていた役者が笑顔で現れた。

「ビールをお願いします」

冷えたタンブラーが届き、一口飲むと菊之助は息をついた。舞台を終えたあとの上気した顔がぽっと浮かび上がった。

ふっと視線を落とすと、右手の親指の爪に楽屋風呂では落としきれなかった白粉の残りが、かすかにあった。役者ならではの色気だった。

「ぼくはそんなには、きれいではないですよ」

大曲を踊りきった満足感が、その言葉をいわせたのか、口調はきびきびとしていた。

「きれいだと、お客さまがいってくださるのは、それはうれしいですよ。でもね、玉三郎のおにいさんが二十代、三十代のときは舞台に出ると、客席のジワがやまなかったといいます。僕にはそんなことはありませんから」

舞台の「出」の瞬間、役者の美しさに、ざわめきが客席に起こり、しばらくおさまらないありさまをジワという。

確かに若き日の玉三郎のジワは、圧倒的なものがあった。けれども、今の菊之助のジワも十分すぎるほどだと私は思う。時代も違えば、人も違う。かつてはこうだったと比較してもさしたる意味はない。

菊之助の驕ることのない人柄は承知している。けれど、なぜ、菊之助が急にこんな話題を持ち出したのか、私はしばらく考え込んだ。平成の若女方として、比類なき美しさを誇る今を、静かに受け止めればよいではないか。

しばらく思いに沈んだ後、私は言葉を継いだ。

「玉三郎さんが二十代のとき、学生だった私がその美しさを話題にしたら、恩師に『(六代目中村)歌右衛門のジワはそんなものではなかったよ』とたしなめられました。團菊じじい、菊吉じじいとよくいいますが、今となっては孝玉じじいでしょうか。当時の孝夫(現・片岡仁左衛門)と玉三郎さんの人気はすさまじかったのは事実ですけれどね。伝統藝能の世界は、いつも過去がよかった、すばらしかったと言い続けるものではないのですか」

幕末から明治に活躍し、近代歌舞伎の礎を作った九代目市川團十郎と五代目尾上菊五郎、次いで明治後期からその後を担い、現代の歌舞伎に大きな影響を今も残す六代目尾上菊五郎と初代中村吉右衛門まで引き合いに出したのは、おおげさだったろうか。

ホテルの薄暗いバーに席を移して、取材は続いた。

「いや、でも、ぼくはそんなには美しくない。このごろそう思うんです」

菊之助は繰り返した。

『京鹿子娘道成寺』は、歌舞伎舞踊の頂点に立つ大曲である。『京鹿子娘道成寺』を踊るとき、歌舞伎役者は女方の美を一身にまとった存在となる。

白拍子花子の踊りが中心となるが、青々と頭を剃り上げたしつらえの鬘をかぶった所化が舞台上に居並ぶ。道成寺の坊主である。歌舞伎座のような間口の広い劇場で上演するときは、二十人近い所化が出て、舞台をにぎやかにする。

菊之助自身も初舞台の翌年、昭和六十年の三月、父七代目尾上菊五郎が白拍子花子を勤めた国立劇場の舞台に、所化喜観坊として出ている。わずか七歳のかわいらしい所化だった。

このとき、所化は十八人が出演した。けれど、二十年以上の歳月が経過した今、同じ舞台をともに勤めた役者のなかで、本公演で道成寺を踊ったのは、菊之助ひとりしかいない。

昭和五十二年八月一日、菊之助は菊五郎家の嫡男として生まれた。本名寺嶋和康。彼は、生まれ落ちたときから、『京鹿子娘道成寺』の白拍子花子と『春興鏡獅子』の小姓弥生後に獅子の精を踊ることが宿命づけられていた。だれもが生まれたばかりの寺嶋和康に、いずれは、この大曲を踊り、喝采を浴びる役者に成りおおせてほしいと期待した。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com